

「新精選古典文法 三訂版」 内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っておりまます。

東京書籍「新精選古典文法 三訂版」—「精選言語文化」関連表

※「新精選古典文法 三訂版」の例文(練習問題を含む)のうち、「精選言語文化 002-902」から採録した例文の一覧。教科書の単元順に、「新精選古典文法 三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。



1 古文入門

児のそら寝

文法書	例文	教科書
P41	今は昔、比叡の山に児ありけり。	P102L1
P43	し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、	P102L3
P75	ただ食ひに食ふ音のしければ、	P103L5
P78	寝たるよしにて、いでくるを待ちけるに、	P102L4
P101	いま一度起こせかしと思ひ寝に聞けば、	P103L4
P108	この児、さだめておどろかさむずらむと待ちゐたるに、	P102L6
P108	「や、な起こし奉りそ。」	P103L2
P113	無期のうちに、「えい。」といらへたりければ、	P103L6
P121	「幼き人は寝入り給ひにけり。」	P103L3
P134	「幼き人は寝入り給ひにけり。」	P103L3
P137	「いざ、かいもちひせむ。」	P102L2
P137	僧たち笑ふこと限りなし。	P103L6
P148	待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、	P102L3
P163	「や、な起こし奉りそ。」	P103L2
P166	「や、な起こし奉りそ。」	P103L2

絵仏師良秀

文法書	例文	教科書
P113	「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きけるものかな。」	P110L8
P148	「かうこそ燃えけれど、心得つるなり。」	P110L12

大江山の歌

文法書	例文	教科書
P155	「こはいかに。かかるやうやはある。」	P112L7

2 隨筆

徒然草

[丹波に出雲といふ所あり]

文法書	例文	教科書
P113	「いざ給へ、出雲拝みに。」	P116L4
P128	「ちと承らばや。」	P117L5
P149	「深きゆゑあらん。」	P117L1
P156	「ちと承らばや。」	P117L5
P158	定めて習ひあることに侍ら()。	P117L5

P158	「いかに殿ばら、殊勝のことは御覽じとがめずや。」	P117L1
P185	「いざ給へ、出雲拝みに。」	P116L4
P185	すゑ直していにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。	P117L7

[ある人、弓射ることを習ふに]

文法書	例文	教科書
P17	「この一矢に定むべしと思へ。」	P118L3
P29	「初心の人、二つの矢を持つことなけれ。」	P118L2
P70	この戒め、万事にわたるべし。	P118L5
P171	「初心の人、二つの矢を持つことなけれ。」	P118L2

[九月二十日のころ]

文法書	例文	教科書
P21	あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。	P121L1
P34	かやうのことは、ただ朝夕の心づかひによるべし。	P121L2
P56	やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。	P120L13
P90	その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。	P121L3
P112	ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩くこと侍りしに、	P120L1
P148	明くるまで月見歩くこと侍りしに、	P120L2
P148	その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。	P121L3
P149	案内せさせて入り給ひぬ。	P120L4
P150	やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。	P120L13
P160	その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。	P121L3

[今日はそのことをなさんと思へど]

文法書	例文	教科書
P100	頼みたる方のことは違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりはかなひぬ。	P122L2
P106	かねてのあらまし、みな違ひゆくかと思ふに、	P122L6
P106	一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。	P122L5
P164	一年のうちもかくのごとし。一生の間もまたしかなり。	P122L5

方丈記

[ゆく河の流れ]

文法書	例文	教科書
P18	朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。	P124L8
P18	知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より來たりて、いづ方へか去る。	P124L9
P19	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P124L2
P29	所も変はらず、人も多かれど、	P124L7
P29	消えずといへども夕べを待つことなし。	P125L3

P72	いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。	P124L7
P76	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P124L2
P76	あるいは大家滅びて小家となる。	P124L6
P83	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P124L1
P110	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P124L1
P136	世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。	P124L2
P137	消えずといへどもタベを待つことなし。	P125L3
P137	露落ちて花残れり。	P125L2
P138	知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。	P124L9
P146	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P124L1
P146	たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、貴き、賤しき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。	P124L4 ～L10
P146	あるいは露落ちて花残れり。	P125L2
P149	何によりてか目を喜ばしむる。	P125L1
P162	二、三十人がうちに、わづかに一人、二人なり。	P124L8
P164	ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。	P124L1
P166	あるいは大家滅びて小家となる。	P124L6

枕草子

[五月ばかりなどに山里に歩く]

文法書	例文	教科書
P146	五月ばかりなどに山里に歩く、いとをかし。	P128L1

[春は、あけぼの]

文法書	例文	教科書
P70	春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。	P131L1
P97	火など急ぎおこして、	P131L7
P156	雨など降るもをかし。	P131L3

3 歌物語

伊勢物語

[芥川]

文法書	例文	教科書
P19	昔、男ありけり。	P134L1
P40	見れば、率て来し女もなし。	P135L5
P56	白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを	P135L7
P59	女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに來けり。	P134L1
P76	「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。	P134L5
P80	やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。	P135L4
P94	神さへいといみじう鳴り、	P134L7
P99	はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、	P135L1
P107	昔、男ありけり。	P134L1
P147	やうやう夜も明けゆくに、()ば、率て来し女もなし。	P135L4
P155	「かれは何ぞ。」となむ男に問ひ()。	P134L5
P155	足ずりをして泣けどもかひなし。	P135L5
P167	はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、	P135L1

古文学習のしるべ4 和歌の解釈

文法書	例文	教科書
P145	高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ	P136 上 L9

[東下り]

文法書	例文	教科書
P21	富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。	P139L1
P42	三河国八橋といふ所に至りぬ。	P137L5
P44	道知れる人もなくて惑ひ行きけり。	P137L4
P45	京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。	P139L10
P73	白き鳥の、嘴と脚と赤き、鳴の大きさなる、	P139L9
P74	その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。	P137L10
P74	東の方に住むべき国求めにて行きけり。	P137L2
P74	「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」	P139L7
P78	もとより友とする人、一人、二人して行きけり。	P137L3
P86	橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。	P137L7
P91	渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、	P139L10
P93	限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、	P139L6
P97	京に思ふ人なきにしもあらず。	P139L8

P100	限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、	P139L6
P143	唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしづ思ふ	P138L1
P149	東の方に住むべき国求めにて行きけり。	P137L2
P154	武藏国と下総国との中に、いと大きなる川あり。	P139L5
P155	なりは塩尻のやうになむありける。	P139L4
P156	限りなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、	P139L6
P158	名にし負はばいざ言問はむ都鳥	P139L12
P159	「かかる道は、いかでかいます。」	P138L5
P165	その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。	P137L10
P167	橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。	P137L7
P169	三河国八橋といふ所に至りぬ。	P137L5
P169	京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。	P139L10
P171	道知れる人もなくて惑ひ行きけり。	P137L4

[筒井筒]

文法書	例文	教科書
P17	男はこの女をこそ得めと思ふ。	P141L2
P52	風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ	P142L2
P81	君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも	P142L11
P85	君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る	P142L14
P90	この女をこそ得め	P141L2
P93	男も女も恥ぢかはしてありけれど、	P141L2
P100	筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに	P141L5
P102	風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ	P142L2
P142	風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ	P142L2
P147	前栽の中に隠れみて、河内へ()顔にて見れば、	P141L12
P148	男も女も恥ぢかはしてありけれど、	P141L2
P148	悪しと思へる気色もなくて、	P141L11
P152	昔、田舎わたらひし()人の子ども、井のもとに出でて遊び()を、大人になりに()ば、男も女も恥ぢかはしてあり()ど、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむあり()。さて、この隣の男のもとより、かくなむ。	P141L1 ～L4
P156	君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも	P142L11

[梓弓]

文法書	例文	教科書
P40	わがせしがごとうるはしみせよ	P147L7
P65	わがせしがごとうるはしみせよ	P147L7
P136	「この戸開け給へ。」	P147L3

P185	そこにいたづらになりにけり。	P148L1
------	----------------	--------

◎言語活動 和歌を自分の言葉で書き換える

文法書	例文	教科書
P64	老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな	P149L4

4 日記

土佐日記

[馬のはなむけ]

文法書	例文	教科書
P24	船路なれど馬のはなむけす。	P154L8
P92	年ごろよく比べつる人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに夜更けぬ。	P154L6
P150	住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。	P154L5
P151	男もするる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。	P154L1
P154	潮海のほとりにてあざれ合へり。	P154L9

[帰京]

文法書	例文	教科書
P50	いとはつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。	P158L5
P73	見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや	P159L3
P87	中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、	P158L3
P148	とまれかうまれ、疾く破りてむ。	P159L4
P149	声高にものも言はせず。	P158L5
P158	「あはれ。」とぞ人々言ふ。	P158L9
P165	今宵、「かかること。」と、声高にものも言はせず。	P158L5
P185	なほ飽かずやあらむ、またかくなむ。	P159L2
P187	とまれかうまれ、疾く破りてむ。	P159L4

5 和歌

万葉集

文法書	例文	教科書
P17	うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば	P164L11
P27	紫のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも	P162L4
P102	田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ不尽の高嶺に雪は降りける	P163L10
P103	うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば	P164L11
P126	憶良らは今はまからむ子泣くらむ	P164L2

P141	あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る	P162L2
------	--------------------------	--------

古今和歌集

文法書	例文	教科書
P14	秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる	P167L2
P24	五月待つ花橘の香をかけば昔の人の袖の香ぞする	P166L7
P40	世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし	P166L2
P57	世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし	P166L2
P87	五月待つ花橘の香をかけば昔の人の袖の香ぞする	P166L7
P101	思ひつつ寝ればや人の見えづらむ夢と知りせば覚めざらましを	P168L6
P149	思ひつつ寝ればや人の見えづらむ夢と知りせば覚めざらましを	P168L6
P152	秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる	P167L2
P165	世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし	P166L2
P169	思ひつつ寝ればや人の見えづらむ	P168L6
P171	夢と知りせば覚めざらましを	P168L6

新古今和歌集

文法書	例文	教科書
P93	見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮れ	P173L11
P144	心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ	P173L8
P144	志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月	P174L2
P152	心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ	P173L8

古文学習のしるべ5 和歌の修辞

文法書	例文	教科書
P140	山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば	P177 下 L3

6 作り物語と軍記物語

竹取物語

[なよたけのかぐや姫]

文法書	例文	教科書
P6	今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P186L1
P78	「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」	P186L5
P83	野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。	P186L1
P86	名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P186L2
P90	もと光る竹なむ一筋ありける。	P186L3
P93	名をば、さぬきのみやつことなむいひける。	P186L2

P96	三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。	P186L4
P114	今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。	P186L1
P120	「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」	P186L5
P151	寄りて見るに、筒の中光りたり。	P186L3
P157	あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。	P186L3
P159	「子になり給ふべき人なめり。」	P186L6
P168	「竹の中におはするにて、知りぬ。」	P186L5

[天の羽衣]

文法書	例文	教科書
P11	「いざ、かぐや姫、きたなき所に、いかでか久しくおはせむ。」	P188L11
P27	「そちらの年ごろ、そちらの黄金賜ひて、身を変へたるがごとなりにたり。」	P188L2
P29	格子どもも、人はなくして開きぬ。	P188L12
P70	天の羽衣入れり。	P189L4
P83	格子どもも、人はなくして開きぬ。	P188L12
P121	かぐや姫、「もの知らぬこと、なのたまひそ。」とて、	P189L11
P121	翁を、いとほし、かなしと思つることも失せぬ。	P190L11
P122	「きたなき所の物聞こし召したれば、」	P189L5
P124	一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」	P189L5
P125	いみじく静かに、朝廷に御文奉り給ふ。	P189L12
P135	一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。」	P189L5
P155	きたなき所に、いかでか久しくおはせむ。	P188L11
P155	今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける	P190L6
P156	「もの知らぬこと、なのたまひそ。」	P189L11

[富士の山]

文法書	例文	教科書
P24	あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ	P192L9
P37	駿河国にあなる山の頂に、持てつくべきよし仰せ給ふ。	P192L11
P54	御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。	P192L12
P88	「いづれの山か天に近き。」	P192L6
P114	広げて御覽じて、いとあはれがらせ給ひて、物も聞こし召さず。御遊びなどもなかりけり。	P192L4
P115	「駿河国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る。」	P192L7
P117	大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き。」と問はせ給ふに、	P192L6
P117	中将、人々引き具して帰り参りて、	P192L3
P126	薬の壺に、御文添へて参らす。	P192L4
P127	かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。	P192L3

P146	あふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ	P192L9
P150	峰にてすべきやう教へさせ給ふ。	P192L11
P154	その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。	P193L3
P155	死なぬ薬も何にかはせむ	P192L9
P159	薬の壺に、御文添へて()。〈差し上げる〉	P192L4

平家物語

[木曾の最期]

文法書	例文	教科書
P9	よつびいてひやうふつと射る。	P203L10
P37	今井が手を取つてのたまひけるは、	P197L6
P43	「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。」	P202L9
P68	兼平も勢田で討ち死につかまつるべう候ひつれども、	P197L9
P74	木曾は長坂を経て丹波路へおもむくとも聞こえけり。	P196L10
P81	「弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最期の時不覚しつれば、長き疵にて候ふなり。」	P201L13
P81	中に取り込め、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。	P203L4
P90	主従五騎にぞなりにける。	P199L5
P99	「あつぱれ、よからう敵がな。最後のいくさして見せ奉らん。」	P200L4
P123	「さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろし召されたるらんぞ。」	P202L12
P128	「しばらく防き矢つかまつらん。」	P201L4
P130	「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。」	P201L1
P149	五騎がうちまで巴は討たれざりけり。	P199L6
P149	所々で討たれんよりも、	P201L10
P163	鎧よければ裏かかず、	P203L4

[祇園精舎]

文法書	例文	教科書
P65	おごれる人も久しうからず、ただ春の夜の夢のごとし。	P205L1
P75	猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。	P205L2

7 俳諧

奥の細道

[漂泊の思ひ]

文法書	例文	教科書
P62	月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。	P210L1
P75	予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、	P210L5

P93	月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。	P210L1
P147	あけばのの空朧々として、	P211L9
P154	予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、	P210L5
P167	月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。	P210L1

[平泉]

文法書	例文	教科書
P78	衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。	P213L5
P104	三代の栄耀一睡のうちにて、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。	P213L1～L3